

彼はスマホ依存症《重症》

A. 適当

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

望月冬夜くんがスマホ依存症だったifストーリーです。
神様にマジ切れするので、身体強化のおまけが貰えませんでした。
嗚呼、あはれなり。いと悲しき哉。

以前投稿した短編

俺の想像してた異世界スマホ <https://novel.systeetu.org/128258/>
を下敷きにしています。

目 次

- 第一話 「死亡、そして逆ギレ、からの復活。」
- 第二話 「出会い、そして手助け、からの案内。」
- 第三話 「検索、そして戦闘、からの仲間。」

14 7 1

第一話 「死亡、そして逆ギレ、からの復活。」

スマートフォン。略してスマホ。粹に略せばスマフォ。
それは人類の生み出した文明の利器。叡智の結晶。

通話に文通、写真撮影、音楽や動画の視聴からゲームまで、手のひらサイズのそれ一台で様々なことができる。

現代社会においてスマホは必要不可欠であり必需品。全世界共通のハイパーマルチデバイス、それがスマホ。

日本のスマホ普及率はおよそ5割、世帯で見れば7割という半数以上の数値を出しており、それがスマホ依存症という社会現象まで起こしているのだからすさまじいものだ。

視力の低下や歩きスマホによる被害も多々あるが、それでも批判されないのはリスクよりも利便性の方が高いからだ。

昨今では身近に親しまれているスマホだが、その成り立ちと言えば全身である携帯電話、いやもつと遡つて第二次世界大戦にアメリカ軍に用いられた携帯型双方向無線機『Waikie Talkie』だろうか。

日本で言えば1970年に日本万国博覧会の電気通信館で展示されたワイヤレスフォン。しかしこれまた500kgを越える質量を持つので携帯するには些か難しいだろう。

であればやはり、1985年に発売された『シヨルダーホン』こそが携帯電話の起源だろうか。それは名前のとおり、肩に掛けて持ち運ぶ電話で重さも約3kg。だいたい150g程度の現在のスマートフォンと比べてしまうと20倍と遙かに重く感じるが、これでも家の外で電話が出来るというのは革新的だ。

そして1987年には手で持てるハンディタイプのものになり900gほど。1990年にはテレビのリモコンほどの今でも工場などで使われているものによく似た形状となり、1997年で今のメール機能であるショートメールが実装、1999年で液晶がカラーになる。

2000年に馴染み深いカメラ機能が取り付けられたものが販売され。2002年には携帯電話で撮った画像がメールに添付できるようになる。2004年におサイフケータイ、2006年でこれまた馴染みの『S u i k a』とテレビ視聴『ワンセグ』が追加された。

そしてその裏で、スマートフォンは開発されていた。

1993年にアメリカでPDAこと携帯情報端末が発売された。この段階ではまだモノクロ液晶をタッチペンで操作するタイプであり、現在の形にはまだ及ばない。

そこからはさらに形が迷走していくので少々割愛して2008年。日本ではソフトバンクモバイルより『i Phone』が発売され、2009年にドコモがAndroid搭載のスマートフォンを販売。この段階ではもう現代のスマホとそう大差ない外見だろう。カラーフィルムで指圧感知、機能とまだ造形に余分はあるがイメージしうるスマートフォンに許容されるだろう。

ちなみに小中学校に携帯の所持が禁止されたのはこの頃のことだ。そして次々にPDAの機能を追加し、無駄なボタンを削減しスリムになり現在に至る。

ここまで携帯電話とスマートフォンを同列に語つてきたが、しかし2つは系譜は違えずとも実態は別物と言つていいだろう。

そもそもスマートフォンは無線通信機としての携帯電話と、超小型パソコンとしてのPDAを1つにしたものと言える。

だからもつと根本的な部分、OSの話からしなければいけないので割愛だ。

強引にまとめればそう、携帯電話はあくまで『電話』に過ぎず、スマートフォンはどちらかと言えばパソコンの派生に近いのだ。通話機能付き小型廉価パソコン、と言つたところか。

まあ、実際のところ携帯電話とスマートフォンに明確な定義はないとする場合もあるのでこれがまた非常に曖昧であるため、その線引きは受け取り手に委ねられ各々の判断に任せられることとなる。

「——と言うわけで、お前さんは死んでしまった

搔い摘まみつつも長々と列举してきた次第だが、これもすべてスマ

ホで調べれば簡単に出てくる情報だ。

情報化社会とは全くよく言つたもので、そのとおり、『情報』に特化した携帯端末であるところのスマートフォンの利便さが伝わることだろう。

現代人が手放さなくなつていくのは必然であるのも頷ける。

そうして生まれる言葉が『スマホ依存症』。文字通りスマホに依存した人を揶揄するものだが、これも仕方のないこと、避けられぬ定めであり、人類は後に総じてそう呼ばれることとなるだろう。

「ちよつとした手違いで、迅雷を下界に落としてしまつた。本当に申し訳ない」

ここでふと、顔を上げると目の前に老人がいることに気がつく。少しの間、誰かの話声が聞こえていたがどうやらこの人のものだつたらしい。何のことかわからないが、こちらに頭を下げていて。

「まさか落ちた先に人がいるとは」

「はあ」

空返事をすると今見ていたページを消し、何気なく『死迅雷』で検索。するとそこに表示されたのは、検索に失敗した表記と圈外の表示だけだつた。

「圈外……どういうことだらう？」

周りを見渡せば、そこには広大な雲海が広がつていた。遙か上空、飛行機にでも乗らなければ見られないような景色だつた。そしてその中で異色なのが、僕が座つていることが置であり、ちゃぶ台を挟んで老人と二人きりということだつた。

とつさにスマホのGPSをオンにするが、圈外なのだから繋がらない。

「えつと……もちづき……」

「？……どうや。望月冬夜ですけど」

「そうそう、望月冬夜君」

どうやら名前を知つていたみたいだけど、一体なんなんだろう。スマホの圈外といい、この状況といい、わからないうことが多すぎる。「しかし君は落ち着いてるのう。死んだと言われたら、もつとこう

……慌てたりするもんだと思つていたが、さつきからスマホ見てばつかだし……」

「は……？」

今この老人はなんて言つたんだろう。死んだ？ 確かにそう言つたような。そう言えばさつき迅雷に当たつて死んだつて言つてたつけ。それも、手違いで、まさか落ちた先人がいるとはとかなんとか……。

「しかしのう、いくらなんでも人が話しているときにはスマホは関心せんの」

そこでようやく僕は自分の置かれた状況を理解した。

こみ上げた感情に合わせ、息を吸い込む。

「……ふ」

「ふ？」

「ふざけないでください!!」

「ええ……」

ちやぶ台を力任せ叩きつけると立ち上がり、そして老人の胸ぐらを掴む。

「ふざけないでください！ 手違い？ 迅雷を落とした？ まさか人がいるとは思わなかつた!? そんな理由で死んで納得できますか普通！ 第一、それつてもう僕の人生終わりつてことですか!? どうしてくれるんですか、このスマホだつて、もう圈外のまま使えないって言うんですか!?」

「お、お、落ち着きなさい。儂も悪いと思つとる。だからすぐに生き返らせよう」

「は？ あ、はあ。えつと……はい。ならいいんですけど」

そうならそうと早く言ってくれればいいのに。脅かさないで欲しい。

僕は老人から手を離すと胸をなで下ろした。

「ただのお、元いた世界に生き返らせる訳にはいかんのじやよ」

「はい？」

「そういうルールでな。別の世界で蘇つて貰いたい」

「は？」

僕にはこの老人の言つている意味がわからなかつた。

昔、じいちゃんが人の過ちを許せる人間になれつて言つてたけど、これは許しちゃいけないことだと思う。

「その世界つてどんな世界なんですか……？　日本と何か違うんですか？」

「スマホは使えないんですか？」

「すまんのお、君の転成先は科学の発展していない世界なんじゃ。科学に変わつて魔法。魔法の使える世界じや。そのスマホは……残念ながら、造られていないじやろうな」

僕にはこの爺が何をほざいているのか理解できなかつた。

「人を手違いで殺しておいてその言い草ですか！」

「お、おおつと、ま、待ちなさい。わかつとる、悪いのは儂じや。だから、何か罪滅ぼしをさせてくれんかの？　君の望みを聞きたい」

「罪滅ぼし？　望み？」

ならこの爺が死んで償うのはどうだらうか。

しかし言い留まる。それは本当に僕の望みだらうか？

いいや、違う。僕の望みと言えば――

「じゃあ、その世界でもスマホを使えるようにしてください。それが僕の、唯一の望みです」

「ええ……」

「できないんですか？」

文明の利器を手放すなんて僕には耐えられない。今にもスマホを使用不可能にしたこの爺に対しての怒りが止まないんだ。そんな僕がスマホを完全に手放すことになつたら……とても生きては行けないだらう。

「い、いや、できるとも。しかし見るだけ読むだけ、君からの直接干渉はできん。通話やメール、書き込み関係は……」

「は？　できないんですか？　僕、あなたの手違いで死んでるんですよね……？」

「わ、わかつた。わかつたから、もうなんでもするがよい……」

「充電については？　科学が発展してない世界ですが――充電できな

いなんてことはありませんよね?」

「それは君の、魔力で充電できるようにしよう。それでよいな?」「わかりました。ということは僕にも魔力があるんですね? そして、いずれ魔法が使えると」

「そうじや」

「じゃあそれに加えて……」

「まだあるのか」

「そんな世界じや壊れたときに直せる人も業者もないですよね? だからこれ、壊れないようにしてください」

そして僕という『スマホ依存症』患者の——第二の人生が、始まる。

第二話 「出会い、そして手助け、からの案内。」

目を開いたとき、一番に視界に入ってきたのは生い茂る木の葉。そして差し込む木漏れ日に、その先の覗く空。

起き上がり辺りを見回すところ、建物は見あたらず広大な自然のみが広がっていた。

澄んだ青空に、ゆるやかに流れしていく雲。切り立った山々と、果てなき草原。

一見田舎の風景だけど、このときの僕の目にはどこか神秘的に映り、そこが異世界なんだと直感した。

何もないド田舎というよりは、手付かずの自然と言つた方がぴったりだ。

「本当に、異世界に来ちゃつたんだな……」

僕はポケットからスマホを取り出す。電源を入れれば無事液晶にホーム画面が映し出された。

「お、電波も来てるし充電も満タン。これなら問題なさそうだ！」

3ちゃんにTwitter、検索機能、アプリ、インターネットを使用する機能は無事作動する。いつものようにスマホを操作していると、一つ問題に直面する。

ただ一つ、地図機能が使えない。

圏外？ そつかGPSを閲知する大元は元いた世界にしかないんだよな……。

多少の苛立ちを覚えたそのとき、スマホから着信音が鳴った。着信名『神様』。

登録した覚えがない相手だ。切つちやおうかと思つたけど、神様を自称する老人なら心当たりはあつたし不都合もあつたので通話を押した。

「もしもし」

『おお、繫がつた繫がつた。無事着いたようじゃな』

「はい一応』

『うむ。スマホも問題ないかの？ 君の望みどおりになつてゐると思

うのじやが』

「それなんんですけど、地図機能が使えないんです。これってスマホの機能ですよね？ スマホの機能に欠落があるんじや望みが叶つたとは言えないと思うんですけど」

『……そう責めるでない。よしわかつた。地図やその他機能、儂が少しいじつておこう。今後も異常があつたら連絡するがよい。儂の番号は登録しておいたからの。……本当に、君には悪いことをしたとは思つとるんじやよ』

言い終えた数秒後、地図が無事機動しこの一体らしき画像が表示された。

「ありがとうございます！ 今のところそれ以外は大丈夫です」

『うむ。ではまた、何かあつたら連絡を寄越すがよい』

初対面こそボケた爺だつたけど、思ったより話せる人みたいだ。スマホに迅雷を落としたことはちゃんと悪かつたと思ってるみたいだし……少し印象が変わったなあ。

地図で確認すれば、近くに町があることがわかつたのでとりあえずそこへ向かうことにした。

決して近くはない距離だつたけど、スマホがあれば道中の暇つぶしには困らない。ブツクマークしたサイトやスレのチェックをしていれば時間はあつという間だ。

道中馬車が後ろから迫つてくるということがあつたが、そこは僕の秘技『ながらスマホ』。スマホとの付き合いの長い僕ならスマホを弄りながらもある程度周囲を察知できる。

画面を見つめたままでも、なんとなく避けることができる。

ついでに僕の『歩きスマホ』は普通に歩くよりも断然速い。

気づけば目の前には洋風の町があつた。いつの間にか目的地にたどり着いていたようだ。

町に着いたのはいいものの、特に目的がなかつた。いきなり異世界に連れてこられても、目標なんてないしなあ。

「——約束が違うわ！」

適当にぶらぶら歩いていると、路地から女人の人の声が聞こえた。

覗いて見れば、ガラの悪い男二人、少女が二人。

「代金は金貨一枚だつたはずよ！」

「見る、ここに傷があるだろ？　だから銀貨なのさ」

男が少女に謎の突起物を見せつけ、そして銀貨を床に投げた。

「たつたの一枚!?　そんな小さな傷、キズモノのうちに入らないわよ

！」

「お姉ちゃん……」

気の強そうな子が声を上げ、妹らしき気の弱そうな子が心配する。どうやら何かの商談のようだ。

上手くいっていないようで、察するに女の子が売つたものに男たちがけちをつけているところだろう。

「もういい、お金はいらない。その角を返して貰うわ

「おつと、そうはいかねえ！」

「もうこれはこっちのもんだ！」

少し言い争つたあとに、男たちはなんとナイフを取り出した。

女の子たちが僅かにたじろぐ。男たちはまだあくまで脅しのようで、襲いかかる素振りはない。

状況的に男側が悪いと見た。手のスマホを見る。文明の利器、スマホがあればなんだつてできるはずだ。

確信した僕はできるだけ足音を殺し、男に近づいた。

「あの～すいません

「うおつ!?　なんだ、お前急に……」

「今取り込んでんだ後に……」

「二人とも、ちょっとこれ、見てくれませんか？」

慌てる男たちに促したのは、スマホの背面。その上端にある丸いレンズ。

——そして僕は、カメラのシャッターを押した。

「ぐああああああ!!　目があああああああ!!」

「テメエ何を……」

「これは返して貰うよ！」

男たちが目を押さえた隙を見て突起物（角？）を奪い取る。

「さあそこの一入、逃げよう！」

「えつ、えつ！」

「早く！」

逃げるように言うも、二人は状況が飲み込めていないようで動かない。

目がまだ見えていないであろう男がナイフを振りかぶる。

「テメエ！ いきなり現れて何勝手なこと——」

考えが甘かつた。少し後悔を覚えたそのとき。

「はあつ」

気の強そうな女の子が男にカウンターを決め、拳一発で殴り倒してしまった。

「商品を持つてないならこっちのもんよ。いつとくけど先にやつたのはそつちだから正当防衛だからね！」

「お姉ちゃん……」

勝ち誇った少女に苦笑い。僕が心配するまでもなかつたみたいだ。

「はい。角だつけ？ なんか余計なことしちゃつたみたいだね」

「ううん。そんあことないわ。あなたのおかげで角も無事だし、あります

がとう」

「あ、ありがとうございます」

女の子たちは姉妹で、それぞれエルゼ、リンゼと名乗った。

強気な方が姉、エルゼ。弱気な方が妹、リンゼ。僕も名乗り互いに自己紹介を済ませた。

「さつきの光つてなんですか？」

お礼もしたい、ということで場所を変える道すがら、リンゼが話題を出した。

「ああ、あれは……」

説明しようとして止まる。この世界はスマホがない世界だから……。何て説明すればいいんだろう。

「そうだ、魔法だよ。光魔法。まあ、町中だから威力を抑えて目くらましにしたんだけど」

「へえ、冬夜さんは光魔法の適正があるんですね！　私は火と水があるんですけど、光はないんで尊敬します！」

火と水が使えるんだ。そう言えば神様が僕にも魔法が使えるって言つてたけど、実際なんの属性が使えるんだろう。

「ねえ、その魔法なんだけどさ、その適正？　って確かめられるのかな？　僕最近光魔法が使えるってわかつたばかりでさ」

嘘は言つていない。今さつき使えることにしたから。

「そうだつたの。ならリンゼに教えて貰うといいわ。この子、私と違つて頭がいいから」

「助かるよ」

「私でよければ……」

町の休憩スペースに腰を落ち着けると、リンゼが魔法の属性と適正について説明をした。

「で、その適正を調べるのが……はい、この魔石です！」

リンゼが取り出したのは七色の石。なんか似たようなのをどこか見たことがあるぞ……そうだ、乙クリスタルだ。

「この魔石は魔力を増幅、蓄積、放出できるんです。たとえば……」

リンゼが石に魔力を込めるなり、石から水が吹き出した。

次にエルゼが魔力を込めるのだが、何も起こらない。

「こうやつて、適正があれば魔法が発動するんです」

「へえ。覚えてるタイプのわざがないと乙技が使えないみたいな感じだね」

「適正は人それぞれなので、私は水が使ってもお姉ちゃんは使えません。ですが代わりにお姉ちゃんは身体強化の魔法が使って私には使えないんです」

水属性の魔石を渡され、試しに魔力を込めてみる。

「水見式みたいだ」

内心わくわくしていた僕だったが、残念ながら反応はなかつた。リンゼに違う色の石を渡され、魔力を込めてみるもののは反応はない。光

属性以外の六色が反応を示さなかつた。

がつかりだ。がつかりだ。大事なことだから二回。

「冬夜さんは……光属性しかないみたいですね。念のため光属性の魔石も試してみますか？」

「いやいいや。残念だなあ、リンゼみたいに複数の属性があつたらよかつたのに」

話を逸らす。光属性の石もしかすれば反応しないのかも知れないし。

「さて、冬夜にお礼をするつて話だつたけど、どうしようかしら」「冬夜さん、何か困つてることとかないですか？」

「困つてることなんて……ああそうだ、実はさ、僕旅を始めたばっかりでこのへんのことよくわかつてないんだよね。町のこととか、そもそもここでの生活の仕方も決まってなくつてさ」

「あ、そうなんですね。あんな状況で助けてくれたので、私はてっきり、冬夜さんは熟練の冒険者なのかと」

「いやいやない。この服装見てよ。地元の生活着のままだよ。

でさ、情けないことにお金もろくになくなつてさ、何か仕事を探したいんだけど……」

そう考えると困つてることはたくさんあつた。普段着のまま異世界に放り出された僕はポケットのイヤホンと財布、そしてこのスマホくらいしか持ちあわせていない。

神様は何を悪いと思つて僕をこんなところに放り出したんだろう。「それならちようどいいわ！ 私たちそのうちギルドに行こうと思つてたの。これから一緒に行きましょう。ギルドに登録すれば仕事も探しやすいわ」

「私たちもまだ登録してないんです。登録しなくても別に仕事は探せないこともないんですけど、さつきみたいな悪い相手にも会つてしまふんで……。ギルドの紹介なら信用できますし、落ち着いたら行こうと思つてたところなんです」

「じゃあお礼つていうことでさ、案内して欲しいな」

こうして、三人でギルドへ向かつた。

第三話 「検索、そして戦闘、からの仲間。」

「すいません、魔法が使えないんですけど」

『すまんのお……お前さんにはスマホ充電用の魔力は与えたんじやが属性魔法については考えておらんかった。数日待つとくれ、何か方法を考えるからの』

「そうなんですか。まあスマホ 자체は使えてるんで、まあ待ちますよ。お、イベント始まってる』

『……スマホ以外になら寛容なんじやな』

「おすすめは……』

『何か違うことしとらんかね？』

「いえいえ。電話してるんですよ、何をするんですか』

『ならいいんじやがの、こうしてスマホだけで会話するとの、お前さんが何をしてるかわわかんないじやろ』

「ガチャは……うーん、ダメかあ。縁おでんでいけるのかな』

『……』

「そうだ、これ課金とかつてどうすればいいんですか？……ん、あれ

? もしもーし、もしもーし?』

切れてる。どうしたんだろう。

「冬夜、さあ行きましょ』

「わかつた』

ギルドに着いた僕は更なる問題に直面した。

文字が、読めない。

ギルドの登録も字が書けないんじやできないじやないか。

「どうやつたんだよ原作の僕は。アニメじや登録の描写なかつたじやんか!』

「文庫版を買いなさいよ、全く。仕方ないわね、なろう版だと血液をカードに染み込ませれば自動で登録されるわ!』

「ありがとうエルゼ。じゃあ文字が書けない下りはいらぬじやないか!』

「お姉ちゃんに冬夜さん……？ 何の話をしてるんですか……？」

登録を済ませた僕たちは壁一面の依頼書とにらめっこしていた。

「ね、リンゼ。この依頼なんかいいんじゃない？ リンゼの方は何かあつた？」

「うーん、私は……あ、これなんかどうかな？」

二人はちゃんと見繕つてるけど、僕は文字が読めずに本当ににらめっこしてるだけだつた。

読み書きはどうにかしないとな……。

時間つぶしにと起動したスマホ、そこでとある機能に思い当たつた。

そうだ、翻訳でどうにかできないかな。

文字を撮影して翻訳するタイプのもので依頼書を撮影した。すると難解だつたこつちの文字が日本語に訳されていた。

——よしかつた。地図やその他機能、儂が少しいじつておこう。神様の言葉を思い出す。

まさか貴方、これを予期して……。

僕の中の神様の印象がまた少し改善された。

あとは書きの方だけど、これはスマホでどうにかなるんだろうか？

「よし、じゃあこれにしましよう。東の森で狼の討伐。全部で五四、報

酬は銀貨18枚」

「冬夜さん、これでいいですか？」

「……え、僕も一緒でいいの？ 報酬の分け前も減るんじゃ……」

「ええ。最初くらいでしょ。今日のお礼もあるし、ね、リンゼ」

「はい。冬夜さんさえ、よければですけど」

「ありがとう！ 僕にできることは少ないかもしれないけど、やれることやつてみるからね！」

二人が依頼の申請をする間にスマホのブラウザをタップ。検索欄に『狼 弱点』。

するとまずオオカミの v v i k i p e d i a がでてきた。そこで

目についたのは、オオカミが犬科犬属であること。

犬……そう言えば犬にはあげちゃいけない餌があるんだつけ。犬

を買つてゐる友達から聞いたことがある。

間髪入れず、検索欄に打ち込むのは『犬 食べたら死ぬ』。

検索結果は——ネギ。

上から数件ですぐに答えはわかつた。しかしネギか……そんなの落ちてるはずもないし……。

「ねえリンゼ」

「は、はい！ 何ですか冬夜さん！」

「悪いんだけどさ……銅貨一枚、貸してくれないかな。この依頼が終わつたら返すから」

「はい。いいですよ。今日助けられますし、そのお礼としてでも……」

「いいや。ちゃんと返すから、じゃあちよつと討伐の準備があるんだけど、いいかな？」

森の中は静まりかえつていた。その静けさはしろ嵐の前のものと同じように、不安や警戒心を煽らせた。

不意に草むらが揺れ、そこから黒い塊が飛び出した。

「狼よ！」

エルゼの声が、初依頼の初戦闘の始まりを告げた。

「ブースト、はあああああ！」

「炎よ来たれ、赤の飛礫、イグニスファイア！」

エルゼが強化した腕力を狼にたたき込んだ。手にはめたガントレットも相まって狼には致命傷となる。

リンゼが放つた炎は狼を打ち抜き灰燼と化した。

そして僕は——

「なんでスマホで写真撮つてるんだよ!?」

光魔法（大嘘）で視界を邪魔するのみ。

どつからどう見ても戦闘には見えない行動だ。

こちらへ駆ける狼に向かつて連写。馴れない音と光に驚いてか、すぐさま後退した。

「冬夜さんありがとうござります！」

「やるじやない冬夜！」

納得できない。これが異世界での僕の戦闘なのか……。

「これで——五匹目！」

エルゼの一撃で依頼が終わつた。事なきを得ず、僕の初依頼は無事完遂された。

——が。

突如、木の影から狼の遠吠えがあがつた。

「不味いわ！ 仲間を呼んでる！」

「せつかく依頼が終わつたのに……一旦引こう、お姉ちゃん！ 冬夜さん！」

元来た道を引き返そうとする僕たちだが、時遅し、気づけば狼たちに囲まれていた。

楽勝に見えた異世界の初依頼、すぐにその危険性が露わになる。

そうだ、これは魔獣——生物の命を狩ること。狩るからには、同時に狩られる心構えもしなくてはいけない。

僕はここにきて自分があまりにも楽観していたことに気づく。

スマホ1台で戦場で立つ馬鹿がどこにいる。

しかしそのスマホが——

——僕に思考を与える。

「そうだ！」

スマホで事前に調べて用意しておいた、アレがあるじゃないか。

「どうしようお姉ちゃん」

「大丈夫よリンゼ、こんなやつら……」

拳を構えるエルゼだつたが、それは強がりだつた。一匹を倒すのは簡単かもしれないが、それが多数、それも全体の数がわからないとならば、彼女でも厳しいだろう。

二人の顔には、焦りと恐怖が浮かんでいた。
じわじわと距離を詰めてくる狼たち。一斉に攻撃を仕掛けるタイミングを伺っていた。

そこへ僕はそれを振りかざす。
「と、冬夜!？」

「冬夜さん何を!?」

振りかざしたのはネギ。長ネギ。元の世界でいう八百屋にあたる店で購入したものだ。

「たあああああ!!」

勇者の剣のことく、勢いよく切りつけたのはネギ。食用野菜。それこそ戦闘の光景じやないけど、でもネギは思った以上に効果を発揮する。

狼たちが足を止めた。どころか撤退していく個体もちらほら。

狼たちは野生の魔獣だ。ペットの犬なんかとわけが違つて、ネギという野菜の危険性をそのDNAに深く刻んでいる。

ネギ類の持つ毒素は犬には致命的で、犬科犬属の狼も同じだ。

ほとんどどの狼が撤退していく中、数匹はやはり襲いかかってくる。

「冬夜！ 危ない！」

悲鳴に近いエルゼの声があがる。それでも僕は動じない。だって、スマホがくれた力があるから。

狼の顔に向かつてネギの入った布袋を投げつける。狼はそれに噛みつき——急に、攻撃を止める。

「エルゼ、今なら倒せる！ リンゼも動きが鈍つてるやつなら魔法で狙えない！」

「わかつたわ！」

「やつてみます！」

エルゼの拳が狼を穿ち、リンゼの魔法が狼を焼き払う。

そして僕は、ネギを震いスマホのシャツジャーを連写する。

およそ十数分後、当初の目的の倍である十四匹を倒して狼の迎撃に成功する。

「やつたわね冬夜！」

「すごいです冬夜さん！ 一体何をしたんですか!?」

「狼はこの草を苦手とするんだ。上手くいってよかつたよ」

しかし、あつちの世界の知識がこつちでも通用する保証はなかつた。狼と一言に言つても生態まで同じとは限らないのだ。我ながら危ない賭けをしていたことになる。

手の中のスマホに目を落とす。流石スマホ。これさえあればなんでもできる。これがなくちゃ僕はやつていけないだろう。

そう強く、実感した。

依頼を新しく申請しなおし、予定の倍の報酬を受け取った。

報酬は銅貨18枚。それを二つ分なので、36枚。三人の配分は一

人当たり12枚。

ちなみに12枚は六日分の宿代だ。これで数日は生活が保証される。

「冬夜のおかげで予定より多く稼げたわ！」

「そうだ、ありがとうリンゼ、借りてた分……」

「いって言つてるのに……」

「何冬夜、リンゼからお金借りてたの？」

「それは……」

いやなところを見られた。ネギを買うために借金は格好悪い。

「別に返さなくていいって言つてるのに。冬夜さんには依頼でも助けてもらつてるんですけど……」

「いやでも狼を倒してたのは二人の攻撃だし、一人がいなかつたら、僕一人じゃ結局なにもできてなかつたよ」

「……そうだ冬夜！ ならお金は返さなくていいから、これからも一緒に依頼を受けない？ なんとなくだけど、冬夜がいれば今日みたいにピンチを切り抜けられると思うわ」

「私も賛成です！ あとは冬夜さんさえ、よければなんですけど……」

魅力的な提案だった。実際のところ魔法が何も使えない僕。

戦闘面を彼女たちに任せ、僕がスマホで援護する。それなら僕もこの世界で生きていくれる。

「冬夜さん……」

「冬夜……」

「わかった。じゃあ、これからお願ひしてもいいかな？」

そうして、僕に仲間が出来た。